

外国語学習の誤解を解く¹

木村 春美

はじめに

1. 母国語・外国語・第二言語
2. バイリンガル
3. 言葉の学びの臨界期・環境・達成度
4. 効果的で効率的な第二言語学習（に向けて）
5. 第二言語学習の副産物

はじめに

外国語を学んでいる『大人』の学習者の中に、言葉の学びに関して少し誤解があるのではないかと感じる場合があります²。そしてそれが、学習を妨げるようなものであったら残念なことです。言語を学ぶ仕組みを知ることで、日々の外国語の学びを、少し効率的に、より効果的に、そして豊かにできればという願いをもとに内容を構成しました。

学問的な基盤は、第二言語習得という比較的若い分野の研究に置いています。応用言語学とも呼ばれることの多い分野で、この名称は言語学という、古い歴史を持つ研究分野を外国語の学びや指導に応用する学問として始まったことに起因します。しかし、外国語の学習や指導を考える過程で、実は言語学ばかりではなく、心理学・社会学・教育学・文化人類学をはじめ様々な分野の知見をいわば総動員して探求すべき、まさに学際的な研究領域であるという理解が進み、第二言語習得研究という名称が定着してきました。研究成果という名の『発見』を一般の外国語を学ぶ方々の日々の学習に役立つ知識に加工してお伝えし、さらに、個人の生き方・あり方としての多言語主義、社会のあり方としての複言語主義についても考えることをねらいとしています。

文章の読みやすさを優先し、文中の文献引用は避け、最後に文献リストとしてまとめています。また、日本語に定訳がないことが主な理由で、英語の単語をそのまま使用し、後ろに日本語の解説を加えることにした用語もあります。次の章では、いくつかの用語を整理します。用語を知ることが、その学問領域を理解する第一歩です。

1. 母国語・外国語・第二言語

第二言語という言葉は、日常的には聞き慣れない用語だと思います。生まれた時から慣れ親しん

でいる言語は母語、母国語、あるいは第一言語と呼ばれます。それ以外の言語の総称として第二言語という用語を使い、母国語以外の言語の学びを第二言語習得と呼ぶのが通例です。ですから、三番目に得意な言語も第二言語に含めて考えます。日本人の多くにとって、英語は第二言語であり外国語でもあります。第二言語と外国語を区別して使うこともあります。例えば、インドでは英語は公用語ですので外国語ではありません。外国語はその言語が日常的に話されていない地域において学ばれる言語を指す表現だからです。

前述のように第二言語という表現は学術用語として定着していますが、中には、これに疑問を呈したり、意図的に使用を避ける人たちがいます。『第二』には順位付け、さらには価値判断が含意されることを嫌うことが大きな理由です。第二言語の語彙習得分野の草分けとも言えるニュージーランド・ヴィクトリア大学ウェリントン校名誉教授のポール・ネイション氏は代表的著作のタイトルに *another language* (もう一つ別の言語) という表現を用いました。さらに、*additional language* ([母国語に] 加えて使える言語) という表現も使われます。どちらも母国語以外の言語知識や技能をプラスアルファとして肯定的に捉える表現です。これは、第二言語の学習目標は母国語話者と同様の言語力であり、第二言語学習者の技能や知識は多くの場合、不完全であるとみなされてきたことに対する反論でもあります。母国語以外の言語をどの名称で呼ぶかは、単に用語と定義の問題を超えて、研究者の研究上の立場や哲学や信念に関わる問題でもあるのです。

2. バイリンガル

バイリンガルと聞いて具体的に頭に浮かぶ人はいますか。例えば、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定したIOC総会で、最終投票直前に行われた東京のプレゼンテーションに於いて東京の魅力をフランス語で語った滝川クリステルさんは、誰もが知るバイリンガルでしょう。バイリンガルと聞くと、滝川さんのように生まれた時から二ヶ国語に触れて生活し、どちらの言語も不自由なく使える人を指すというイメージをお持ちの方が多いと思います。滝川さんのような人たちを *balanced bilingual* (どちらの言語も遜色なく併用する人) と呼びます。バイリンガルの最も狭い定義付けです。

一方で、日本で外国語を学ぶ私たちのように、成長の過程のある時期から母国語以外の言語の学習を始める人たちがいます。このような人たちを *sequential or successive bilingual* (1つ目の言語が先行し、その次に2つ目を学ぶ人) と呼びます。この場合、2つ目以上の言語知識や技能がどの程度育てば、あるいはどの程度駆使できればバイリンガルと呼ぶかについて決まりはないのですが、これは運用能力の高さと共に、個人のアイデンティティの問題とも深く関わりのあることだと考えられています。名古屋を起点に研究教育活動を行っている馬場・新多両氏は著書の中で、言語に関わるアイデンティティを「立ち位置」と表現しています。母国語に加えて使うことのできる新たな言語で自己表現が可能になった自分を、他者との関わりの中でどのように捉えるかが「立ち位置」です。このシンポジウムにご参加いただいている方々も、広い意味でのバイリンガルだと私は思っています。

近年、スピルバーク監督のハリウッド映画“Ready Player One”（邦題『レディィー プレイヤー 1』）に出演したことで話題に登った森崎ウィンさんは、ミャンマー語、英語、日本語を話すバイリンガルです。The Japan News（Sep. 25, 2018）に掲載されたインタビューの中で、「ミャンマー語で話すときは子供っぽくなり、日本語は謙虚、英語はクールな口調になる。」と語っています。3つの言語を使う異なる社会的場面によって自分のあり方が変わることを、わかりやすく表現されたと思います。さらに付け加えると、世界を見渡せば一つの言語しか使わない人より、多言語を使う人の方が圧倒的に多い現実があります。多言語知識・複言語社会などについては後述します。

3. 言葉の学びの臨界期・環境・達成度

3.1 言葉の学びの臨界期

言語の学びは早く始めれば早いほどよい、と考えられる向きがありますし、子どもは何の苦もなく言葉を自然に学んでいくが、大人になると外国語に熟達するのは至難の技だと感じている学習者が多いのではないのでしょうか。これらの考え方は、言語習得の臨界期仮説と深い関わりがあると思われれます。

臨界期は元来、動物に見られる「すり込み」の現象を指す用語です。例えば、アヒルやカモは孵化の直後数時間の間に近くにいる親鳥の姿を記憶し後追いするようになりますが、その期間が過ぎしまうと、見たのがたとえ親鳥であっても後を追うようにはなりません。錦華鳥なども、孵化後に仲間や親鳥の鳴き声を聞かないで育つと、60日から100日後に鳴き声を聞く環境に戻されても、固有の鳴き声を十分に獲得することができません。このような発見から、その特定期間がある学習にとって重要な境界（または限界）に至るまでの時期であるとして「臨界期」と呼ばれるようになりました。潜在している機能が発達する上で特定の刺激が必要となる、限られた期間を指す概念です。しかし、臨界期が存在するという仮説の根拠となった現象は、例にあげたように、動物の視覚や聴覚のような原初的な感覚領域におけるもので、脳の特定部位の働きと密接な関係を持つ技能に限られています。

一方で、言語習得は、前頭前野の広い領域に関わる複雑な認知的統合作用を伴うものであり、臨界期仮説をそのまま言語習得に応用する議論は、実験結果の解釈に問題があること、時期や期間について様々に異なる提案がなされ一致を見ないこと、成人してから第二言語の習得を開始したにも関わらず、母国語話者並みの言語能力を身につけた学習者が存在すること、など数々の問題点が指摘されています。変わって、言語習得に対する感受性が特別に敏感になる期間という意味で「敏感期」という概念を用い、その時期を過ぎて効率が落ちることはあっても学習自体は可能であるという議論も広く受け入れられるようになりましたし、学習の分野によって異なる臨界期なり敏感期を想定せざるを得ないという妥協案もあります。特に音声面での学習には臨界期があるという考え方が根強く残っていると云わざるをえません。他方、学習能力の低下は、言語学習以外の側面にも見られる認知能力の低下と同様に考えるべきで区別する必要はないという主張も広く受け入れられるようになりました。

これまでの議論をまとめると、臨界期は動物の視覚や聴覚に関する技能の獲得に提案されている仮説であり、単純に人間の言語習得全般に当てはめるのは無理がある、と考えるのが妥当なのではないかと思います。

3.2 学びの環境

世界で英語が使われ、学ばれている環境は多様です。社会としてだけでなく個人としての状況も視野に入れると、まさに千差万別と言わざるを得ないかもしれません。

グローバル化の流れの中で、世界で英語が使われている環境を考えると大きく分けて3つに分類されます。北アメリカやイギリスなど英語を母国語として使っているいわゆる英語圏を Inner Circle、インド・シンガポールなど公用語や通用語として英語が使われている Outer Circle、そして日本などのように外国語として英語を学んでいる Expanding Circle です。英語を母国語とするいわゆるネイティブスピーカーはもはや大多数ではありません。世界の総人口の3人に1人が英語を用いていますが、英語を母語としている人たちはその5分の1にすぎないのです。Expanding Circle (広がりつつある円) という用語からもわかるように、私たちのように日常的に英語を使う必要はなく、教室でのみ英語に触れ、英語を意識的に学んでいる人たちがこれから益々増えていくだろうと予測されています。ここでは詳しく触れられませんが、英語の置かれている環境は変化していて、学習モデルについての考え方も変わりつつあります。

学習者の置かれている状況の特徴を考える場合、ESL (English as a second language) (第二言語としての英語) と EFL (English as a foreign language) (外国語としての英語) という区別も有益です。例えば、北アメリカに移民した人々は日常生活で英語を耳にする機会が多いですし、英語を使ってコミュニケーションを行う必要性も生まれますから、このような環境を ESL と呼び、生活の中で自然に言語を習得する環境であると考えます。一方、日本や韓国のように外国語環境で教科として学ぶ場合を EFL と呼びます。この場合、学校などで指導を受けて学ぶ環境であることが多いと思います。

研究の結果、言語の学び始めが早ければ早いほど良いのは自然な環境で検証されている事実です。Inner circle に移り住んだり outer circle で育てば、言語の学びに欠かせない input (読んだり書いたりして受動的に経験する言葉の情報) と output (話したり書いたりして能動的に発信する情報) の機会が潤沢に用意されています。幼年期に移り住めば、肌の色などに関係なく誰とでも友達になりますし、間違いを気にすることも少ないでしょう。成長してから新しい言語の環境に放り込まれると、同じ母国語を話す仲間としか交流しなかったり、間違いを恐れて新たな言語パターンを回避する傾向も生まれ、言語が十分に育ちにくいのです。ですから、小学校高学年の子どもたちは、意識して学習しやすい年齢に達しているため最初は良いスタートを切りますが、低学年やそれ以下の年齢で移り住んだ子どもたちにやがて追い抜かれる結果となりがちです。早いほうが良い、という意見はこれらの自然な環境で得られた研究結果から導き出されたものです。

他方、日本のような外国語環境では、このような結果は検証されていません。今までにどれくらいの時間を外国語学習に費やしたかを考えてみてください。中学・高校・大学を合わせた平均的な

学習時間は1,120時間です。これに対して、英語圏で育つ子どもたちは5歳児になる頃までにおよそ17,520時間のinputを受けると考えられています。もちろん、時間のだけの問題でないのは当然ですが、「若いほど良い」の原則は、日本の学習環境には当てはまらないことをご理解ください。

3.3 達成度

私たちが英語の技能テストを受けるとき、比較の対象となるのは母国語話者の英語技能です。何かと比べないと測定することは難しいですから致し方ないことではあるのですが、近年、母国語話者をものさしにすることに対して異論が唱えられるようになってきました。以下に、主な議論をまとめます。

バイリンガルと呼ばれる人たちの研究の先駆者であるジム・カミンズは、母国語と第二言語の言語能力は、深層において共有されていると考えました。つまり、母国語以外の言語に触れることで、母国語のより豊かな使い手になることに繋がりますし、母語の知識や技能が外国語の力をつけることに役立ちます。

また、multicompetence（多言語能力）という考え方も提案されています。母国語の文法規則や発音の仕方、あるいは語彙の特徴が新しく学ぶ言語に影響することは長く知られていましたが、マイナスの影響ばかりが強調されてきました。母語の干渉と言われる現象です。しかし、使う言語の知識は相互に影響し合いますので、新たに言語を学ぶことによって、母国語のあり方も変化します。つまり、母国語以外の言語を学ぶ人の言語知識は母国語しか使わない人の言語知識とは異なるので、これらを単純に比較するのは意味のないことです。

では、より建設的な比較とはどのようなものなのでしょう。私たちが英語を学ぶ目的は様々ですから、学習目標を考えるとき、自分ができるようになりたいことと、今できることを比べるほうが理に合っています。その意味でも、「ヨーロッパ言語共通参照枠」と呼ばれているものは示唆的です。目標設定と目標到達基準の枠組みを提供していて、母国語話者の言語知識との単純比較とは異なります。つまり、複数の使用可能な言語に関して、自分がその言語を用いて何をどのくらいできるのかを記述する枠組みです。移民の流入により、ヨーロッパ各国も複言語・複文化を受容し育てていくことが求められ、そのような社会で生み出された枠組みです。日本でも2013年に文部科学省初等中等教育局が『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標設定のための手引』を公表しましたし、NHKの基礎英語シリーズでも現在は各レベルの共通目標として「CAN-DO 項目」を使っています。

3.4 まとめ

ここでは、第二言語学習者を縛ってきた臨界期仮説に疑問を呈し、第二言語学習を考える上で区別すべき第二言語環境と外国語環境の違いなどを説明した上で、「若いほど良い」という誤解の是正を試みました。その上で、ヨーロッパ言語共通参照枠の基礎となる考え方も紹介しました。この議論を経て、次は学びの実践の話題です。

4. 効果的で効率的な外国語学習（に向けて）

「10,000 時間の法則」というのを聞いたことがありますか。多くの分野に渡って成功者の練習時間を調べたところ、多くの人が1万時間を超える練習や実践をしていた、という報告からこのように命名されています。自分の努力はまだまだ足りない、と知ってこの事実を背中を押される人もいれば、誰が何を何のためにやりたいかによって事情は異なるはずで、この法則はまやかに過ぎないと批判する人もいます。ここでは、この議論に深入りすることは控え、仮に10,000時間必要であるのなら、効率と効果を目指して時間の有効活用を目指すにはどうしたら良いかを考えるのがこの章のテーマです。

4.1 発音の習得

特に発音については臨界期仮説を支持する意見が多い一方で、グローバル化の中で実質的に国際語となった英語に関して言えば、目指すべきモデルが変わりつつあるとも言えます。例えば、イギリスのサザンプトン大学のジェニファー・ジェンキンズ氏は、非母国語話者同士が使う共通の英語としてリング・フランカ・コア（リング・フランカは共通語、コアは核心部分の意）を提案し、コミュニケーションに大きな支障がない限り、母国語からくる訛りを排除しようとしすぎる必要はないとしています。また、第二言語としての英語の発音研究では、「明瞭性」「外国語訛りの程度」「分かり易さ」の3つの指標が測定基準とされています。通常、「明瞭性」は、録音した発話を文字に書き起こすことができる度合いで計られ、「外国語訛りの程度」には、音素の発音・強勢・イントネーション・スピードが関わり、「分かり易さ」には、これら発音に関する項目に加え、使用語彙の適切性・文法の正確さが影響することがわかっています。相手に伝わりやすい「発話」には、発音の正確さだけでなく語彙や文法知識の運用能力が関わることが、豊かなデータの詳細な分析により示されました。狭い意味での発音練習だけでは、コミュニケーションの目的を十分に果たすことができる技能にはならないと解釈することもできますし、逆に、語彙や文法を学び、使える技能を磨くことが、より理解しやすい英語につながるというのは、発音に自信がなくてコミュニケーションに積極的になれない学習者の背中を強く押してくれる結果であるとも受け取れます。

「わかりやすさ」の指標は、多様化し続ける英語のあり方を考えるとより重要です。英語を母国語としない人同士のコミュニケーションでは、どちらも異なる外国語訛りのある英語を使う中での意思疎通・人間関係の構築が目的となります。お互いの発音のクセが原因で音声そのものは時に聞き取り難い場合があっても、語彙が適切で文法規則が正しく適用できている発話であればお互いを理解し合える英語である可能性が高い、という事実をぜひ心に留めてください。これは、現実路線の解決法であるばかりでなく、前述の複言語・複文化社会を根底で支える態度につながるものだと考えます。

4.2 語彙知識と語彙学習

外国語学習に語彙の学びは基本中の基本です。アポロ11号の月面着陸の様子を同時通訳で伝え

た鳥飼玖美子氏（立教大学名誉教授）も、先立つものは語彙、と明言しています。例えば、現行の学習指導要領では、高校までに学習すべき語彙は3,450語、2020年度からは4,000～5,000語となります。第二言語として英語を使う場合、最低でも2,000語が必要と考えられていましたが、最近では3,000語が必要ではないかという提案もなされています。ただし、ここでは、know / knowledge / knowledgeable / knowingly のような派生語も know / knows / knew / known のような変化形も含めて1語と数えての話ですから、3,000語と言っても実はその何倍も語形があり、達成は決して容易ではありません。

一方で、母語話者は20,000語以上の知識があると言われています。単純に考えて、20歳になるまで一年に1,000語ずつ語彙を増やしていく計算になります。映画『シュレック』を見て理解するには、5,000-6,000語の語彙知識が必要です。5-6歳の子どもはちょうどこれくらいの語彙知識がある計算になり、この映画を十分に楽しめていることがわかります。

さて、語彙はどのように学ぶのが良いのでしょうか。単語カードや単語リストを作ったことはありますか。この二つを比較すると、圧倒的に単語カードが有効です。ランダムに順番を並び替えることができますし、外国語から母国語へ、母国語から外国語へ、記憶の確かさでいくつかの山に分け、覚えられていないものや記憶が確かでないものは繰り返し練習することができます。もちろん、語彙知識は広さと深さの両方が必要で、多義の単語や用法の難しい語もありますが、まずは1単語1意味であっても自動的に使えるよう訓練することに大きな意味があります。ここでさらにいくつか留意点があります。

1. 新語彙の学習開始時は、あまり間隔を置かずにも何度も繰り返し練習し、徐々にその間隔を長くする。
2. 綴りや発音の似ている語彙は、混乱しがちなので一緒にまとめて覚えようとしない。
3. 12ヶ月の名称や果物の名前などまとめて学習しがちですが、実は学習の効率が悪い。
4. 覚えにくい語は、語を部分に分けたり、使う場面を想像したり、意味を連想しやすくするなど、脳の処理を助けるような工夫をする。

文章を読みながら、文脈の中で意味や用法を理解し語彙知識を深め、自然に定着させることも重要です。この場合、読解の素材は同じ分野または似た内容のものを続けて読むと良いでしょう。同じ著者や作家のものもお勧めします。狭い分野の読み物や同一作家の作品では同一語彙が繰り返し出てくる可能性が高く、語彙学習にとって好都合です。ちなみに、この原則は聞き取りの練習にも当てはまります。

読解教材を選ぶ場合、100語中、95-98語を知らないとスラスラ読み進めることができません。日本の英語教育では暗号解読のような読解作業が行われがちですが、平易な読み物を大量に読む多読活動が読解力をつけるために有効だということがわかってきました。もちろん、じっくり読むことも大切な活動ですが、読みの流暢さを訓練することも同様に不可欠で、その中で、あまり意識しなくても語彙知識を深めたり定着させたりできるのです。日本の英語教育で最も欠けているのが、この流暢さの訓練だと思います。

4.3 文法知識の学習と活用

先立つものが語彙だとすると、文法はどのような役割を果たすのでしょうか。読んだり聞いたりして意味を理解しようとするときは、語彙知識を活用して意味内容の情報処理を行いません。一方、書いたり話したりする場合、情報を適切に組み立てる必要があります。文法知識がより大きく貢献します。どの規則も、じっくり考えないと適用できない状況では実際のコミュニケーションに繋がりませんから、ルールは理解しているだけでなく、反射的に使えるよう練習が必要です。この点は、語彙学習の場合と同じです。

語彙学習において頻度の高い語彙から学習するのが原則だとすると、学ぶべき文法規則に好ましい順序はあるのでしょうか。好ましいかどうかは別として、特に形態素の習得には順序があることがわかっています。例えば、進行形の *-ing* は早い段階で習得が可能ですが、三人称単数現在の *-s* は習得に最も時間を要するルールの一つです。理由はいくつか考えられます。形として目立つものは習得しやすく、情報として余分なものは習得が遅れます。これらは、学習者の母国語や年齢にあまり関係なく検証されていますが、一方で母国語の影響で習得が遅れるものもあります。例えば、日本人学習者にとっての冠詞です。母国語に概念がなく、目立たないことが大きな原因だと考えられます。

関係代名詞は使わなくとも意思疎通はできますが、使うべきところで使うと洗練された印象を与え、逆に使いすぎは回りくどい表現になって聞き手をイライラさせることにもなりかねません。上級の学習項目のように思える仮定法ですが、知らないと丁寧な言い方ができないので、対人関係という観点で見ると決まった定型表現に埋め込む形でフレーズとして覚えて使うことをお勧めします。習うことは大切ですが、慣れるとこともまた必要不可欠なのです。

これら様々な文法項目を使いながら習得するために、実際の場面に近い学習課題を自分に課してみてもどうでしょうか。例えば、食材などの買い物に出かけるとき買い物リストを作られる方もあるでしょう。これを一部でも英語で作ってみませんか。食材の中には英語で数えられる名詞も数えられない名詞もありますから、単数形/複数形に注意を向けてリストを作ります。日本語でも数えるものによって「個」「匹」など、異なる数え方が必要ですが、英語では特に数えられないものを数える時には、*a loaf of bread* のように単位を表す表現が必要です。

日本の英語教育では、文法訳読式と呼ばれる指導法が長く行われてきました。その後、より実践的な教授法としてコミュニカティブ・アプローチが主流になり、正確さより流暢さ重視の教育へと方向転換しました。ところが、意思疎通さえできれば良いとなると、文法知識が育たないばかりか語彙知識も発音もあまり向上しないことがわかってきました。つまり、コミュニケーションに重点を置きすぎて、言語能力の育成は頭打ちとなってしまったのです。好ましい表現ではありませんが、言語技能が成長を止めてしまった状態を化石化と呼ぶことがあります。このような問題を改善するために、言語の形式（文法・語彙・発音）に注意を払いながら、情報伝達・意味交渉・問題解決などの課題を遂行する過程で言語技能の育成を目指す指導法へと、再び方針転換することになりました。前述の買い物リスト作りはその例です。

ちなみに、買い物リスト作りの課題は発音練習も兼ねています。*A loaf of bread* などの *of* は発話

の中で曖昧母音の /ə/ で発音されることが多く、よりはっきりしたその他のどの母音とも異なる弱い音ですが、実はこの音は英語の中で最も多く現われる母音なのです。さらに、この音は流暢な発話に欠かせない、連続音声（言葉の間をつなぐ自然な話し方）に重要な役割を果たします。このように、実際のテーマや課題に取り組みながらも、文を組み立てる仕組みや語の用法、そして発音に気を配りながらの学習が言語技能の育成に必要なだとの認識が高まっています。

4.4 まとめ

この章では、外国語の発音・語彙・文法の学びに関して、第二言語習得分野の知見をもとにいくつかの示唆を行いました。それぞれの学び方の奥にある考え方の理解があってこそ、効果が上がると思います。次は、新しい言語を学ぶことの副産物についてです。

5. 第二言語学習の副産物

5.1 認知機能

バイリンガルについては話の最初で触れましたが、これら二か国語以上を使う人たちは認知機能に優れていることが報告されています。認知機能は、とりあえずここでは情報処理・推論・創造性などに関わる能力と考えます。さて、「新しい言語の学びは認知症の予防になる。」は、さらなる誤解、あるいは都市伝説なのでしょうか。または、高齢化が進む社会に生きる私たちにとって、朗報だと言えるのでしょうか。

バイリンガルの方は認知症の発症年齢が単一の言語しか話さない人と比べて 4.1 歳遅いことを示した研究があります。発症してからの進行のスピードは差がないことも分かっていますので、バイリンガルの方は健康寿命が長いと結論づけることができます。異なる言語を並列的に維持しコントロールすることは認知的に負担がかかることです。いわばそのトレーニング効果が認知機能の維持につながっているのであろうと考えられています。しかし、ここには注意書きが必要です。まず、この研究はすでに二言語以上を日常的に使い続けている人を対象にしていますので、第二言語を学ぶことが認知症の予防となる、という結果は今の所まだ出ていません。また、対象となった人たちは日常的に二言語以上を使う環境にいる人たちですから、使用する場面に限られる日本のような外国語環境に当てはまるかどうかについても、今後の研究を待たなければなりません。

5.2 社会との関わり

身体を動かすこと、興味関心を広げ、深めて、余暇を有意義に過ごすこと、そして人と関わること、これらが認知機能一般を維持し認知症の発症を遅らせる効果があると言われていています。もちろん検証は始まったばかりですが、第二言語の学びにはその言語でのコミュニケーションが欠かせないことを考えると、第二言語学習が健康的な認知的生活に一役買うであろうという予測は決して論理の飛躍とは言えないと思います。

コミュニケーションを表すモデルにキャッチボールが使われることがあります。聞き手と話し手

が情報のやりとりをするイメージです。けれども、例えば聞き手は相手が話をしている間に、その意味を理解しようとしているだけではなく、次にどのように話を発展させるか（次に何を言うか）、どこで口を挟もうかも考えています。その場の状況を把握し、相手の気持ちを思いやることも必要です。キャッチボールというより、相手の動きに合わせて自分も動く社交ダンスのイメージの方が適切かもしれません。ある程度その言語に特有の決まりごと（文化）に根ざしたパターンや型に従いながらも、一度しか起こり得ない複雑で創造的な活動を行なっているのです。最近の研究では、社会との深い関わりを持つライフスタイルと認知機能の維持の関連性も示されつつあり、この「社会との深い関わりを持つライフスタイル」の中には、第二言語の学びが含まれます。

学生から、このような質問を受けることがあります。「先生、英語を勉強すると人生が変わりますか？」今まで私はうまく答えられないでいました。「英語が得意になれば、世界に友だちが作れるでしょう。そうすれば、人生は変わるよね。」などと、ありきたりの答えしかできません。中部大学の和田珠実氏は友人ですが、彼女から素敵な答えを聞きました。「人生（生活）を変えれば、英語が変わるよ。」英語をはじめとする第二言語の学びを日々の暮らしに取り入れ、たとえ小さなことでも生活の一部にしてしまえば、必ず言葉の力がついてきます。今度学生からこの質問を受けたら、受け売りのこの答えを使わせてもらうことにしました。言い得て妙、の答えだと思います。

5.3 個人のあり方・社会のあり方

第二言語の学びは、私たちが個人として多言語知識を深め、運用能力を磨き、より豊かな精神生活を送ることに留まるものではありません。より平和で豊かな社会のあり方とも関わりがあります。関西大学の八島智子氏が日本の大学生を対象として行った研究でも、海外で第二言語をコミュニケーションの手段として用い、様々な国出身の人たちと協力してボランティア活動に参加した体験が、自民族中心的で偏狭な考え方の軽減に効果があったことが示されています。

その延長線上にあるのが複言語・複文化主義だと考えることができます。個人が家庭や学校や社会において、異なる言語を用いて、異なる文化的背景を持つ人とコミュニケーションした体験が、人の言語や文化に対する姿勢を柔軟にする可能性を信じます。時として誤解したり、場合によっては誤解されたりしながらも、そんな時こそお互いの理解を深めるために、諦めずに積極的にコミュニケーションを図り、また、継続的に母国語プラスアルファの言語を学び続ける人が増えることが、少なからず社会としての複言語・複文化主義につながるでしょう。世界では内向きの思想が幅を効かせつつありますが、多言語を使う人が複言語・複文化主義を育て支える、そのような文化を小さな努力を積み重ねる中で目指したいと思います。

5.4 まとめ

最後の章のタイトルに『副産物』と付けていますが、実はこの章で述べたことは第二言語学習の一番大切な『果実』であるのかもしれません。『副産物』と呼ぶか『果実』と呼ぶかは、私たち次第です。冒頭部分でも触れましたが、言葉の選択の背後には、私たちの信条が隠れているからです。

【注】

注1 本稿は、2018年11月10日（土）に「日立システムズホール仙台」にて行われた、本学、人文社会研究所、第27回公開講演会（シンポジウム）での報告の誌上再録です。

注2 本稿は、公開講演会用に準備した、話すための原稿に加筆・修正を加えたものであるため、「です・ます調」の文体を採用しています。

【参考文献】

〈英語〉

- Bialystok, E. (2001). *Bilingualism in development: Language, literacy, and cognition*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Bialystok, E., Craik, F. I. M., & Freedman, M. (2007). Bilingualism as a protection against the onset of symptoms of dementia. *Neuropsychologia*, 45, 459–464. doi:10.1016/j.neuropsychologia.2006.10.009
- Bialystok, E., & Hakuta, K. (1994). *In other words*. New York, NY: Basic Books.
- Block, D. (2003). *The social turn in second language acquisition*. Washington D. C.: Georgetown University Press.
- Brown, J. D. (Ed.) (2012). *New ways in teaching connected speech*. Alexandria, VA: TESOL.
- Cristal, D. (2003). *English as a global language* (2nd ed.). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Cummins, J., & Swain, M. (1986). *Bilingualism in education: Aspects of theory, research and practice*. London, UK: Longman.
- Doughty, C. J., & Williams, J. (Eds.). (2001). *Focus on form in classroom second language acquisition*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Gladwell, M. (2009). *Outliers: The story of success*. London, UK: Penguin.
- Grabe, W. (2009). *Reading in a second language: Moving from theory to practice*. New York: Cambridge University Press.
- Grady, C. L., Luk, G., Craik, F. I. M., & Bialystok, E. (2015). Brain network activity in monolingual and bilingual older adults. *Neuropsychologia*, 66, 170–181. doi:10.1016/j.neuropsychologia.2014.10.042
- Green, D. (2018). The interactional challenge: L2 learning and use in the third age. In D. Gabrys-Barker (Ed.), *Third Age Learners of Foreign Languages* (pp. 31–47). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Jenkins, J. (2007). *English as a lingua franca: Attitude and identity*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2009). *World Englishes: A resource book for students* (2nd ed.). London, UK: Routledge.
- Johnson, J. S., & Newport, E. L. (1989). Critical period effects in second language learning: The influence of maturational state on the acquisition of English as a second language. *Cognitive Psychology*, 21 (1), 60–99. doi:10.1016/0010-0285 (89) 90003-0
- Kachru, B. B. (1985). Standards, codification and sociolinguistics realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk & H. G. Widdowson (Eds.), *English in the world: Teaching and learning the language and literature*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Kimura, H., & Ssali, V. (2009). The case for combining narrow reading and listening. *The Language Teacher*, 33 (6), 9-14.
- Kimura, H. (2012). Let's have a party with schwa! In J. D. Brown (Ed.), *Teaching connected speech* (pp. 69–71). Alexandria, VA: TESOL.

- Kinsella, C., & Singleton, D. (2014). Much more than age. *Applied Linguistics*, 35 (4), 441–462. doi:10.1093/applin/amu032
- Larsen-Freeman, D. (2014). Interlanguage: Another step to be taken. In Z. H. Han & E. Tarone (Eds.), *Interlanguage: 40 years later* (pp. 203–220). Amsterdam, NL: Benjamins.
- Lightbown, P. M., & Spada, N. (2013). *How languages are learned* (4th ed.). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Long, M. H. (1998). Maturation constraints on language development. *University of Hawai'i Working Papers in ESL*, 7 (1), 1–53.
- Morley, J. (1991). Trends and developments in listening comprehension: Theory and practice. In J. E. Alatis (Ed.), *Georgetown University roundtable on language and linguistics 1990: Linguistics, language teaching, and acquisition: The interdependence of theory, practice, and research* (pp. 317–337). Washington DC: Georgetown University Press.
- Muñoz, C., & Singleton, D. (2011). A critical review of age-related research on L2 ultimate attainment. *Language Teaching*, 44 (1), 1–35. doi:10.1017/S0261444810000327
- Muñoz, C., & Singleton, D. (in print). Age and multilingualism. In D. Singleton & L. Aronin (Eds.), *Twelve lectures on multilingualism*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Nation, I. S. P. (2006). How large a vocabulary is needed for reading and listening? *Canadian Modern Language Review*, 63 (1), 59–82.
- Nation, I. S. P. (2013a). *Learning vocabulary in another language* (2nd ed.). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Nation, I. S. P. (2013b). Vocabulary acquisition in second language acquisition. In C. Chapelle (Ed.), *The encyclopedia of applied linguistics* (Vol. X, pp. 6102–6110). Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Nation, I. S. P. (2015). Principles guiding vocabulary learning through extensive reading. *Reading in a Foreign Language*, 27 (1), 136–145.
- Ortega, L. (2010). The bilingual turn in SLA. Plenary speech given at the Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics Conference. Atlanta, GA.
- Patkowski, M. S. (1980). The sensitive period for the acquisition of syntax in a second language. *Language Learning*, 30 (2), 449–468. doi:10.1111/j.1467-1770.1980.tb00328.x
- Saito, K., Trofimovich, P., & Issacs, T. (2016). Second language speech production: Investigating linguistic correlates of comprehensibility and accentedness for learners at different ability levels. *Applied Psycholinguistics*, 37 (2), 217–240. doi:10.1017/S0142716414000502
- Scarmeas, N., & Stern, Y. (2003). Cognitive reserve and lifestyle. *Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology*, 25 (5), 625–633.
- Schmitt, D., & Carter, P. (2000). The lexical advantages of narrow reading for second language learners. *TESOL Journal*, 9 (1), 4–9. doi:10.1002/j.1949-3533.2000.tb00220.x
- Singleton, D. (2005). The critical period hypothesis: A coat of many colors. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 43 (4), 269–285. doi:10.1515/iral.2005.43.4.269
- Singleton, D., & Pfenninger, S. E. (2018). L2 acquisition in childhood, adulthood and old age: Misreported and under-researched dimensions of the age factor. *Journal of Second Language Studies*, 1 (2), 254–275. doi:10.1075/jsls.00003.sin
- Skehan, P. (2018). *Second language task-based performance: Theory, research, assessment*. New York, NY: Routledge.
- Yashima, T. (2010). The effects of international volunteer work experiences on intercultural competence of Japanese youth.

〈日本語〉

馬場今日子・新多了（2016）『はじめての第二言語習得論講義』大修館書店

本名信之（2003）『世界の英語を歩く』集英社

松村昌紀（2009）『英語教育を知る 58 の鍵』大修館

投野由紀夫（2013）『CAN-DO リスト作成・活用－英語到達度指標 CEFAR-J ガイドブック』大修館書店

鳥飼玖美子（2016）『本物の英語力』講談社